



“ology”を教えよう

東京医科大学細胞生理学講座

小西真人

医学教育の国際基準とやらが大手をふって罷り通っている。何でも、大学がこの基準にのっとって教育しているという認証を受けないと、卒業生がECFMG (Educational commission for foreign medical graduates) に資格申請できなくなるのだという。何だアメリカの医師国家試験を受けられないだけか、と多寡をくくっていたら、大学としては無視できないらしい。私の大学でも、さっそくカリキュラムの改編が始まった。国際基準を満たすには、臨床実習をできるだけ診療参加型にして、実習期間も72週程度は必要だとのことだ。現在のカリキュラムでは44週しかないの、それを大幅に増やす。となると基礎医学の講義・実習は削減されることになる。

このような流れの中で、基礎医学として何を教えるべきか考えてみた。短い時間の中で細かい知識を詰め込んでも意味がない。むしろ有害かもしれない。枝葉にばかり目がいけば、幹を見失う。詰め込んだ知識など、すぐ忘れる。大事なものは、知識を使って問題を発見し、解決する能力だろう。これこそが、医学教育モデルコアカリキュラムに謳われているところだ。

生理学の細かい知識でなく、問題を解決する能力を習得するにはどうしたら良いか。それは、生理学の講義・実習を通して物の考え方を学ぶことだろう。何か理解できない現象に出会った時、種々の方法により体内で起きている事象を推測し、仮

説を立て、それを実証していく道筋こそ生理学 physiology ではないか。そう考えると、生理学を教える教員が今やるべきなのは、臨床医学の一部を担当して細切れの知識を与えることに満足するのではなく、生理学の核の部分、すなわち“ology”を教えることなのではないだろうか。“ology”なしでは、教育はただの情報の詰め込みになってしまうのだから。

“ology”を学ぶには、ある程度の時間が必要である。現実のカリキュラムはどうか。私の大学では「生理学」という科目が残っているが、大学によってはすべて臓器別に統合されて、その一部として生理学の講義が行われているところもある。このような「統合型カリキュラム」では、どうしても生理学の講義は細切れになりやすく、“ology”を学ぶ環境としては厳しいと言わざるを得ない。そのような場合でも、何とかして“ology”を伝える努力は必要なのではないだろうか。実習や研究室配属を利用したりするのも1つの方法であろう。また、生理学の体系を色濃く反映するようなユニットを統合講義の1つとして提案することも可能かもしれない。

生理学に限らず、基礎医学にはそれぞれに“ology”がある。それらを学ぶことにこそ意味がある。基礎医学を体系的に学ぶことによってこそ、臨床医学が意味のあるものになると私は信じている。今こそ“ology”を教えよう！